

256) 幸せすぎてこわかった

波打ち際を素足のままで あなたのあとを走り続けた
真夏の夜を語り明かして ミルク色した朝が煙った
砂に残した足跡を 波の^{ほうき}帚が消してゆく
あなたと二人あの日々は 幸せ過ぎてこわかった

ためらうように吹く風に わたしの髪がたなびいてゆく
ボンネットには二人の街が 少しゆがんで息づいている
二人出会ったこの街で 夢ふくらんで恋をした
あなたと二人あの日々は 幸せ過ぎてこわかった

あの日描いたそれぞれの夢 いつしか少し変わったけれど
わたしのことは気につけないで あなたの夢を^{かな}叶えてほしい
一度しかない人生を 今のあなたでつらぬいて
あなたと二人あの日々は 幸せ過ぎてこわかった

短い夏が過ぎ去ってゆく 燃えた日々などなかったように
あなたもきつとこの夕焼けを どこかの海で見ているでしょう
海の青さにとけこんだ あの日の二人かえらない
あなたと二人あの日々は 幸せ過ぎてこわかった